琉球大学学術リポジトリ

# ［随想］沖縄の農業



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 沖縄農業研究会<br>公開日: 2009-01-29<br>キーワード (Ja): 沖縄農業, 随想, サトウキビ, 蔗作, 農耕文化, 昭和初期<br>キーワード (En):<br>作成者: 高良, 鉄夫, Takara, Tetsuo<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015434 |

＝随想＝

# 沖縄の農業

高　良　鉄　夫
（元会長，琉球大学名誉教授）

Tetsuo TAKARA：Agricalture in Okinawa's past

ソテツ地獄から漸く脱皮した当世の沖縄の農耕文化は、どのような情景で進化してきたのであろうか。大正末期以来の記憶と若干の記録を辿って、沖縄農業の形態、生態、変遷の概観について述べる。

土質の特性に因って発達してきたと考えられる鉄製の鍬（柄のほかは全金属で先端は鋼）、へら、鎌は、祖先代々の農器具で、すべての農家に備わっていた貴重な三種の要具であったようだ。当時、耕地面積に応じて普通作、雑穀類、蔬菜園芸を主とし、ほとんど自給自足であった。

裕福な農家は豚、駄馬あるいは和牛を飼い、古典的な在来犂を用いて農耕に従事し、前記作物のほか換金作物として蔗作を取り入れていた。耕地面積の大きい篤農家は蔗作が主となり、旧式の製糖所を設置し、蓄力利用の圧搾機を用い、甘蔗の品種は読谷山種（俗に在来種）で、単位収量は少なかったが台風には比較的強かった。メイチュウ類の被害は低かったが、カンシヤワタアブラムシの発生は顕著であった。有力な天敵（オオテントウムシ）の出現と保護活用によって偉力を発揮しても数年後には再び大発生へと誘導された。それはオオテントウムシとワタアブラムシは発生相が異なり、いわゆるシーソーゲームを繰り返していたからである。

その頃から蔗作専業農家が台頭するようになり、次いで昭和の初期頃に大茎種（主としてＰＯＪ系）が導入され、蔗作は一躍基幹作物へと進展した。当世、嘉手納、西原、高嶺等には合理化された工場が設置され、いわゆる粗目（ざらめ）糖を製造していたほか、地域によっては動力用小型圧搾機あるいは旧式の畜力圧搾機の製糖所があった。樽詰黒糖の生産は活気を呈し、黒糖樽は那覇市に集荷されていたので、当時の野路街道は、黒糖運搬の荷馬車が延延と続き、とくに松並木の街道を背景とした荷馬車の行列は異色の風物だった。

磯野犂の導入によって深耕は以前より可能となり、且つ土壌の風化と相俟って、野鳥による地虫（主としてアオドウガネ、ハリガネムシ）の駆除は容易となり、蔗作を刺激した。この辺りで非能率的な在来犂は次第に姿を消している。

磯野犂による高率化をねらい、篤農家の中には力量に富んだ輓馬を購入し、農耕は一段と進展したと記憶している。当時の作物は甘蔗、甘藷、稲、小麦のほか雑穀物、各種野菜で、甘藷は救荒作物としての利用価値があり、食物のほか家畜の飼料、加工等用途が広いだけに、離島の至るところまで野面を飾っていた。だが、その加工業は遅遅として進化していなかった。作物の種類は多いが、ほとんど単位収量の低い在来系で品質も劣っていた。

昭和初期頃の試験研究機関として、県立農試与儀本場では、主としてサトウキビの品種改良、各種試験、耕種基準、病害虫等の試験が行われ、小禄の園芸支場では甘藷、移出蔬菜の試験研究、小禄には他に養蚕試験場もあった。普天間支場では小麦のほか雑穀物と家畜の試験も行われ、名護支場では主として水稲に係わる試験が行われ、いずれの農業試験場でも顕著な業績をあげたことは、ここに述べる迄もない。昭和初期頃の那覇港桟橋は、本土向の移出キャベツが便船毎に山積されて

いたことは記憶に新しい。それらの試験研究施設や業績の大半は、戦災のため亡失してしまった。

当時の農業教育機関は県立農林学校（在嘉手納）だけであったが、昭和12年に県立八重山農学校（在石垣市）が創設された。

輓馬による農耕に、磯野犂は広く普及し、沖縄の農耕文化の発展に大きく寄与したが、戦災のために馬匹をはじめ、多くの家畜を失い、戦後、地域によっては再び人力農耕へと後退した。

少し前後したが、昭和初期頃の作物は種類が多いだけに害虫の種類も多かったが、作物の種類によっては抵抗性の強い品種があり、また、野鳥とともに渡り鳥の種類、数量ともに多かったので、特定の害虫のほかは、大発生を見ることは稀であった。

地域によっては甘藷害虫ナカシロシタバ（イモヨトウ）の大発生があり、人海戦術による捕殺のほか、明溝を設けて害虫の移動を防止、あるいは集落のニワトリ集団に捕食させる等、非能率的な防除であった。昭和の初期の頃、除虫菊剤と手動噴霧機による駆除も行われたが、経費の都合で一般農家には思ったほどに普及しなかった。篤農家の中には自らデリスを植栽利用することもあった。

戦後、ＤＤＴ、ＢＨＣ等の有機塩素剤、ついで有機燐剤等の進出と散布機具の動力化に伴い、害虫防除は画期的な成果をあげたが、その反面、農薬に抵抗性の強い害虫の出現、農薬公害の問題を醸した。作物の組織内に侵入食害する、いわゆる難防除の害虫アリモドキゾウムシ、イモゾウムシ、カンシャメイチュウ類の防除は、依然として課題が残されている。

今次戦災で輓馬や農耕器具を失った地域では、ショベル等によって農耕を続けたが、食糧増産政策に基ずき、新畑、新田が開け、イモや米の増産に伴い、地域によってはイモ澱粉の加工業も活発になった。

当時、甘藷普及増殖のため、中頭郡東恩納に農業試験場が開設されていた。県内各地はもとより、外国から優良品種を導入し、各種試験が行われていたが、植物検疫制度が確立していなかった時世だけに、導入品種とともに新害虫イモゾウムシが侵入伝播した。既存の重要害虫アリモドキゾウムシと同格に評価されたので、発生地域を調査するとともに緊急防除を実施したが、時すでにおそく、ついに各地に土着するに至った。その頃、八重山群島では新害虫サツマイモメイガが発見され、防除に困惑したが、幸いに同群島では、既存の天敵クロテンフシオナガバチ（ヒメバチ科）によって駆除され、今日その発生は見られない。

食糧難をいち早く克服した地域では、甘味資源不足の巷の声に、サトウキビの増殖と糖業の振興が話題となり、旧式の製糖所で黒糖製造が復活した。　戦災によって輓馬や犂、主要農器具を失った地域では、前に述べたようにショベル等によって農耕に従事していたが、糖業の復活に伴い、省力栽培へと指向、ハンド・トラクターの導入が活発になり、組合あるいは集落の共同製糖所が各地区に設置され、黒糖製造は著しく進展した。

時世のすう勢として、原料キビの増産に伴い工場の大型化が台頭し、分密糖工場が各地区あるいは主要島に進出した。従来の小型黒糖工場は整理され、新たに離島では中型黒糖工場が設置された。他方、糖業の復興に伴い、日本分蜜糖工業会（在那覇市）内に、沖縄蔗作研究協会が付設され、甘蔗に係わる試験研究をバックアップ、糖業の発展に寄与した。

本土復帰後、さらに文明の利器にものいわせ、地域によっては大型トラクターへと進展、同時に機械化農耕の特段の成果を目標に、耕地内の除岩作業も活発になった。

農耕に大型トラクターが作動したのは、南大東島をもって嚆矢とする。そこでは当時、小島でありながら大陸的な農業が展開されていた。各戸の農耕地面積の大きいことと、労力の不足等が機械

化を推進する基本になったようだ。地域によって耕地の交換分合が巷の風説となっていたが、諸般の事情から顕著な成果をあげるに至らなかったといわれる。

糖業の復興に伴い、また食糧事情も緩和され、イモ畑は次第に減り、それに代わって蔗作は大きく発展し、野面はいたるところサトウキビ畑に変わった。甘蔗収穫機の大型化、それに適合する品種、副産物の高度利用をめざして、糖業の先進地へ企業家、技術者等の研修も活発になった。

本土復帰後、農耕上のめざましい改革は野路、農地基盤の整備である。要所に農用ダムが設置され、土地改良に伴い、農業の機械化へと進展してきた。水田地帯も蔗作のために改良され、沖縄の糖業に一新紀元が訪れた感がした。だが、その後諸般の事情から蔗作面積は減退の一途を辿り、原料キビの減少から製糖会社の合併、工場の閉鎖など、沖縄の糖業は厳しい情勢におかれている。その大きな要因は蔗作農家の老齢化、若人の蔗作ばなれが多くなったことである。若人に魅力のある蔗作をめざして対策がなされつつあるが、若人の蔗作ばなれは、他の農業分野との係わりも要因のひとつになっていると考えられる。

沖縄の本土復帰に伴い、園芸作物が活気を呈し、キクの電照栽培、ビニールハウスによる施設園芸、ミバエ類の根絶に伴って熱帯果樹、果菜類が伸び、蔗作から園芸作へと指向の重点が変わった。とくに熱帯果樹は観光とも係わって、近年各地区に観光農園が開設されている。さらに地域によっては、タバコ作とも競合し、蔗作は窮地に追い込まれている。

原料キビの品質取引が迫っており、品質取引の在り方が、蔗作農家の意欲に大きく影響することは、ここに述べるまでもない。行政と技術者の一層の努力に期待する。沖縄の風土は、前に述べたように亜熱帯ー熱帯農業に適しており、我が国で残された唯一の地域である。石垣市に農水省の熱帯農研所が設置されていることは、故なきに非ず。野路はすいすい、農地基盤は整備され、水利は進んで、過去の農業とは比較にならないほど合理化されている。

沖縄の農業は無限の資源であり、前途には明るい夢と希望がある。若人の蔗作への復帰を期待するとともに、他の作物と併せ、経営面において能力を十分に発揮されるよう念願する。